

女性同性愛者のカミングアウトにおける背景と価値観

石井 美咲

性的指向は本人が開示しない限り周囲から認識されにくい特徴であり、セクシャルマイノリティを身近なものとして捉えることができている人も多いという現状がある。このような社会の状況がさらにカミングアウトへの躊躇を生む悪循環を形成していると考えられる。こうした背景を踏まえ、本研究では、セクシャルマイノリティ当事者たちが抱える課題への理解を深めるとともに、より開示しやすい社会づくりの一助となることを目指す。

先行研究として、男性同性愛者に焦点を当てカミングアウトに対する価値観を調査した研究はおこなわれているが、その一方で、女性同性愛者に焦点を当てた研究は充分でない。また、カミングアウトを受けた立場の人々を対象とする調査も充分におこなわれていない。そのため本研究では、女性同性愛者と、カミングアウトを受けた人々に焦点を当て調査をおこなう。

本研究では半構造化インタビューを通じた質的調査をおこなった。調査対象者は、①身近な人にカミングアウトした経験のある女性同性愛者、②女性同性愛者からカミングアウトされた経験のある者のどちらかの条件を満たす者である。今回の対象者の内訳は①3名、②1名、①と②両方に属す者1名、合計5名である。

カミングアウトに対する価値観は過去に経験したカミングアウトに影響を受けていると推測していたが、今回の調査対象者の中でカミングアウト以外の過去の経験が価値観に影響していたのは5名中3名であった。カミングアウトに対する価値観は、過去に経験したカミングアウトだけでなく、小学生時代の担任との会話など、様々な体験によって形成されていると調査によって明らかになった。また、カミングアウトをすることに積極的な意見を持っている人は1名のみだった。しかしその調査対象者もアウトティングや人間関係などに関する不安を持っていないわけではなく、職場では人間関係でのリスクを恐れてカミングアウトできていない。そのような葛藤を抱える中でも、周囲の人々にセクシャルマイノリティが身近な存在であると認識を改めてもらうためにも積極的にカミングアウトをすべきだとその調査対象者は考えている。さらに、調査対象者たちのカミングアウトは必ずしも相手に受け入れてほしいという願望からおこなったものではないということが判明した。未だ自分たちが受け入れられるような社会ではないと認識しているからこそ、セクシャルマイノリティのコミュニティ以外でリスクを冒してまでカミングアウトするということを避けている状態であると考えられる。また、アウトティングに対する不安からカミングアウトに消極的になっている調査対象者が3名いた。アウトティングという概念自体が一般社会に浸透していないことが問題として浮き彫りになった。これに関して、②の調査対象者もアウトティングという概念を知らなかった。以上より、アウトティングに関する知識の普及が重要であると考えられる。

(指導教員 後藤 嘉宏)